

高等教育研究センター かわらばん

夏号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第19号

夏目の「余剰博士」問題の解決にむけた取り組みを

就職氷河期が叫ばれたのはほんの少し前のことでしたが、いまや景気

回復とともに学生の就職内定率も高い水準です。でも、それはせいぜい博士課程前期課程までの学生であ

り、後期課程の学生の就職は依然厳しいままです。

課程に進むと状況は大きく変わり、就職は難しくなります。文系の博士課程出身者の就職の厳しさは言

うまでもありません。博士課程修了後に就職できない人を、かつては

「その他」は全国平均で3割以上もいます。本学についてみると、後期

理工系学部では卒業後大学院に就職する学生も多いけれど、これは十分に就職先があり、しかも学士

課程卒業者よりも有利な処遇を受けられるからです。つまり学位（それを取得するための経済的負担も）

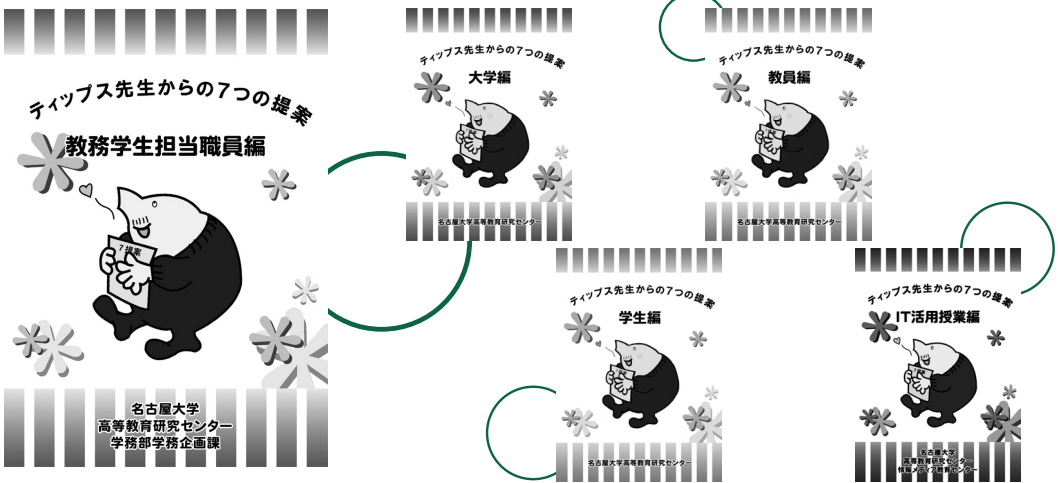
に見合うだけの地位・待遇が期待できるのです。その彼らでも、博士

コースドクターと言いました（私も自身も長らくそう呼ばれていました）

が、今は「余剰博士」というそうです。カタカナで書いても実態は変わりませんが、漢字で書くこと事態

がクリアになりますね。それにしても、国の政策に促されて大学院に進学し、一生懸命勉強した挙げ句に

『ティップス先生からの7つの提案』に 〈教務学生担当職員編〉ができました



ティップス先生からの7つの提案〈教務学生担当職員編〉です。短い冊子ですが、「できるだけ学生を名前で呼びかける」、「学生の勉学意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける」、「窓口での対応などを通じ、学生に社会人としての常識やマナーを教える」などの教務学生担当職員ができる具体的な実践方法が含まれています。

この教務学生担当職員編は、これまでの教員編、学生編、大学編、IT 活用授業編に続く『ティップス先生からの7つの提案』シリーズの5番目の冊子です。学内の方にはお送りしますので、本冊子にご興味がありましたら高等教育研究センターまでご連絡ください。

(中井俊樹)

『ティップス先生からの7つの提案』に 〈教務学生担当職員編〉ができました

大学教育を組織的によりよいものにしたいと考えるなら、教員の資質向上だけで十分とは言えないでしょう。大学における教育活動は基本的に協働的な営みです。そして、教員以外にも多数の人々が大学教育に関わっています。特に教務業務や学生業務を担当する大学職員は、さまざまな側面で学生の学習や発達に貢献していると言えるでしょう。

高等教育研究センターは、学務部学務企画課と共同で、教務学生担当職員が教育の質向上のために何ができるのかを検討しました。多くの現場の教務学生担当職員から学生の学習や発達に資する具体的なノウハウやアイデアを収集し、一緒に議論を繰り返して進めました。この試みの成果を集約した冊子が、『テ

かわらばんに皆さまのご意見・ご感想をお寄せください

前号記事「教育を科学的に議論するムードを大学から！」にコメントをお寄せくださった皆さま、ありがとうございました。多くの反響があり、いただいたコメントのすべてに

はお返事できていないのではと心配しておりますが、その際はどうぞご容赦ください。

これからも様々な話題、論点をお届けしてゆければと思っています。

進のために、ポストドクター等1万人化計画や、「科学技術関係人材

大学院修了後の進路の希望と実態等です。学校基本調査報告書によ

のキャリアパス多様化促進事業」などを行ってきました。しかし、問題

れば、博士課程修了後の進路で就職未定者等が該当すると思われる

の解決を先送りしているという感

「その他」は全国平均で3割以上も

は拭えず、根本的な問題解決には

課程修了者・単位等認定者514

程遠いようです。いま必要なのは、

博士課程出身者の就職先確保のため

の根本的な施策です。3年ほど前に、

特別研究員等15%などとなっています。

に、政府の総合科学技術会議が、

産業界や報道機関に対して、博士

学位取得者の積極的な採用を呼び

かけたことがありましたが、産業

界からは国が博士を大量生産した

ソケを回されることへの反発はあつ

ても、積極的な協力が得られたとい

う記憶はありません。経済が好調

な現在でも、これでは事態の解決に

はなりません。

博士課程出身者の就職先を確保

するために、大学が単独でできるこ

とは限られており、政府の施策に待

つところが大きいとはいえ、大学と

してできることはあるはずです。で

きることから始めてはどうでしょう

か。まず大学院生の現状を正確に

調査・分析することです。大学院

に進学する学生の意識（進学の動

機やきっかけ、大学院への期待等）、

政府も後期課程出身者の就職促

進めようとしている。

(夏目達也)

Curriculum Glossary

カリキュラムにまつわる用語集

コア・コンピテンシー Core Competencies

大学教育のなかでコア・コンピテンシーといえば、「この大学あるいはこの学部を卒業したからには、すべての卒業生が***の能力を身につけていますよ」と宣言し、学生もそれを自覚できるような中核的能力のことを指します。「***」に入るのは、場に応じて知識や技能を操作する能力だったり、課題を解決するにあたっての行動や思考の様式だったりします。北米の大学で重視されているコンピテンシーとしては、つぎのような能力が挙げられています。

- ・コミュニケーション（文章力、会話力、聴解力）・基礎数学
- ・コンピュータリテラシー ・紛争解決 ・批判的思考 ・倫理
- ・対人関係 ・インタビュー ・基礎統計 ・学習スキル
- ・問題解決 ・読解 ・情報活用 ・多文化理解 ・科学的思考

これらの能力の具体的な内容と獲得方法は、大学の文脈によって違います。日本の大学でも、コア・コンピテンシーを検討し、カリキュラムに反映させる動きが、見られるようになってきています。

ビジネスの世界でのコア・コンピテンシーは、すこし様子が異なります。ある企業がもつ、競合他社を圧倒的に上まわるレベルの能力、競合他社に真似できない製品・サービスを生み出すための核となる能力を意味するからです。ここでは、個人の能力ではなく、チームとしての能力が問われています。個人の能力が統合され、シナジーが起きた結果としてのチームの能力が、これまでにない成果を生み出せるかどうかが問われているのです。

それにひきかえ、大学におけるコア・コンピテンシーの議論は、卒業生ひとりひとりの能力に偏りがちです。社会に散在する卒業生たちが、ゆるやかに同窓の連携を保ち、市民社会の一員としての役割を果たせるように、という考え方もあって良いのではないのでしょうか。また、教職員と学生・卒業生が一団となってどんな大学をつくれるのか、というところに、“大学自身の” コア・コンピテンシーを求めることもできるように思います。（齋藤芳子）

これまでアメリカの大学院は、大学院学生が将来の大学教員になるための教育には、あまり関心を払ってきませんでした。大学院においては、専門の学問に精通し、まっしぐらに研究者をめざすことが大事だと信じられてきたのです。なかには、大学教授法などはまったく学ぶ必要がなく、専門分野に精通すれば優れた大学教授になれる、という研究者もいます。残念ながら、多くの研究大学では、こちらの意見が多勢を占めているかのようです。私の勤めるミネソタ大学では、全米科学財団（NSF）の助成により、大学院学生に教育訓練の場を提供しています。NSF 大学院生ティーチングフェロー（National Science Foundation Graduate Teaching Fellows）と呼ばれる大学院生たちは、幼稚園から高校までの公立学校と協力して、科学教

育の質の改善に取り組んでいます。現在、ミネソタ大学に加え、タフツ大学、オハイオ州立大学、ワシントン大学、カリフォルニア大学バークレイ校、ミシガン州立大学、エモリー大学などがこのプログラムに参加しています。これまでのべ167の大学が助成を受け、フェローが接した児童・生徒は25万人以上にのぼります。

大学院生によるアウトリーチ活動の教育効果

指導教員へのインタビューとフェロへのアンケートからは、次のような結果が得られています。「教育スキルを向上させ、カリキュラム開発の経験を積んだ」（89%）、「自身のキャリア形成に役立った」（70%）、「今後の職業選択に役立った」（70%）、「大学外での教育活動について関心と経験を深めた」（48%）、「将来、大学で教える際に参考になる」

（44%）、「自分の研究にプラスの影響があった」（30%）。このプログラムを通じて、フェローの教育スキルと研究スキルの両方が高まっていると認識されていることがうかがえます。コーネル大学では、指導教員の70%が、典型的なティーチングアシスタントよりもこのプログラムの方が有用であると評価しました。当初は、この種のプログラムへの参加は大学院

生の研究活動を妨げるのではないかと懸念する声もありました。アメリカ大学院教育の最大の関心事は、「何年で修了できるか」という点にあるからです。けれど、コーネル大学の29人の教員のうち、このプログラムが院生の研究活動にマイナスになると答えたのは、たった1人でした。好意的にみれば、このプログラムを通じて、大学院生はより学際

的なアプローチで自分の研究を検証するノウハウを学んだと言えるかもしれません。

大学での研究活動は、ともすると過度に細分化されて視野が狭くなりがちです。大学院生がアウトリーチ活動に参加することは、将来の大学教員に大学と社会の関係について考える機会を提供することになります。ひいては、彼らが教育活動に大きな関心をもち、科学的な視野を広げるという効果が期待できます。日本の大学が、公共財や人材の浪費という深刻な事態を回避するためのヒントが、ここにありそうです。

ジェラルド・W・フライ

2006年度高等教育研究センター客員教授。オレゴン大学ほかを経て、現在ミネソタ大学教授。

（抄訳：近田政博）

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

刊行からちょっと時間が経ってしまいましたが、懐かしく手に取ったこの本をご紹介します。原題を“Betrayers of the Truth”という本書は、1988年に化学同人から翻訳が出版されました。今回は、新書になっての再登場です。科学者による不正事件が後を絶たないなかで、約20年ぶりの復刊となったそうです。

W. ブロード、N. ウェイド、牧野 賢治 翻訳

『背信の科学者たち』

ー論文捏造、データ改ざんはなぜ繰り返されるのかー

講談社ブルーバックス 2006年

私が旧版に出会ったのは、工学部の3年生だったとき、週1回のゼミで通っていた研究室でのことでした。壁一面にならぶ書棚の背表紙をきょろきょろと眺めている私に、教授が、「読んでみる？」と手渡してくれたのです。そこには、“めくるめく研究不正の世界”が広がっていました。物語ふうの読みやすさもあって、研究ってそんなに不正の誘惑にかられやすいものな

の？・・・科学者も人の子なんだ・・・などと思いながら一気に読んだことを覚えています。

今回の新版には、こここのところ相次いで報道された不正の幾つかも、巻末に書き加えられています。いっぽうで、「なぜ繰り返されるのか」に対する答えは、あまり進歩していません。それでも、読んでいるうちに、科学が何に価値を置き、どのように営まれてきたかが見えてくるあたりは、昔のまま。科学に背くということの重さが、幾つもの事件を通して、染みこんでくるかのようです。

研究室の書棚に、そっと並べておいていただけたらな、と思う本の1つです。（齋藤芳子）

高等教育研究センタースタッフ (2007年7月現在)

センター長	戸田山和久
専門領域	科学哲学
教授	夏目達也
専門領域	高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
専門領域	比較高等教育学、初年次教育
准教授	中井俊樹
専門領域	大学教育法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
専門領域	科学技術社会論

<平成19年度 海外客員>
マリアンヌ・メルクト (ハンブルグ大学、ドイツ)
ブルース・マクファーレン (テムズヴァレー大学、英国)

<平成19年度 国内客員>
川嶋太津夫 (神戸大学)
吉良直 (日本教育大学院)
本間政雄 (大学評価・学位授与機構)

〒464-8601 名古屋市中種区不老町
名古屋大学高等教育研究センター

Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/